



# 山崎正和著作集



## 藝術現代論

中央公論社

山崎正和著作集 6

定価三五〇〇円

昭和五十七年七月十日印刷  
昭和五十七年七月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二―三三四

©一九八二 検印廃止

I

藝術現代論

藝術と現実——序にかへて

現代の空間のなかで——建築

現代の時間のなかで——小説

現代の「運命」にむかひあつて——劇

現代において抒情とはなにか

一 詩 59      二 音楽 76

現代において叙事とはなにか

一 テレビ・ドラマ 92      二 小説とことば 107

現代人にはなに見えるか

一 造形藝術 123      二 映像藝術（写真） 138

物語の世界を超えるもの

一 演劇（古典演劇） 153      二 小説 168

現代において記録とはなにか——映画

現代において批評とはなにか

現代において藝術とはなにか

## II

藝術の現状と意味——現代の藝術はどこまで来たか

現代演劇・二つの罨——アメリカの小劇場を観て

世界と個性

前衛の土壌

今日と明日の藝術

## III

「文楽協会」の現状と前途

可能性に埋もれた虚弱児

藝術家を題材にするといふこと

342 339 331

304 281 274 261 235

213 198 184

演劇的感動といふことについて

世阿彌現代考

続・日本への手紙

パロディの意味 351

演劇は「祭祀」か 353

ある批評家の死 355

褒め上手 357

ヨーロッパからの脱出 360

シェイクスピアと非ヨーロッパ 362

伊勢物語とアメリカの学生 365

パトロネイジといふこと 368

「狂気」の恢復のまへに 372

世阿彌と前衛のあひだで 375

手とイメージ

一 情報化の歪み 379

二 変質する情報 383

三 アイデンティティーの喪失 387

四 現代藝術の自己解体 391

五 手仕事としての藝術 397

六 ものの復活 400

秋のうた 407

書誌 408

山崎正和著作集 6 藝術現代論





I



# 藝術現代論

藝術と現実——序にかへて

現代の空間のなかで——建築

現代の時間のなかで——小説

現代の「運命」にむかひあって——劇

現代において抒情とはなにか

一 詩 二 音楽

現代において叙事とはなにか

一 テレビ・ドラマ 二 小説とことば

現代人にはなに見えるか

一 造形藝術 二 映像藝術（写真）

物語の世界を超えるもの

一 演劇（古典演劇） 二 小説

現代において記録とはなにか——映画

現代において批評とはなにか

現代において藝術とはなにか

## 藝術と現実——序にかへて——

現代において、野球こそは最高の演劇だといったひとがゐる。オリンピックの入場式を日本の代表的な舞踊家が演出して、それを見たひとが、これこそ現代のほんとうの藝術だといふのを聞いたことがある。最近も万国博覧会のプロデューサーにある前衛画家が任命されたが、そのひとはかねがね、祭典こそが現代藝術の理想の姿だと主張してゐた。

藝術の概念は変わったといふひとが少なくない。さうしてその声に応じて、藝術は昨今、なにかしら大袈裟で騒々しいものにならうとしてゐる。藝術が、現実世界そのもののみかけと大きさを身につけようとしてゐるのである。

「広場」と「お祭」と「群衆」が、現代の藝術家にはあたかも魔術の呪文のやうに響くらしい。広大な空間に巨大なモニュメントを林立させて、そこに幾万の観衆がひしめきあふ光景を、画家や彫刻家たちが憧れてゐる。同じ空間のあちこちにふしぎな音色が響きわたり、それが雑踏のさざめきに混る騒がしさを、作曲家たちが憧れてゐる。やがて、大群衆の行進を現代の舞踊だといふ主張もあらはれるのだらうが、私はさうした意見を聞かたびに、さういへばヒトラーは偉大な藝術家であつたと思ひだされてならないのである。

かつてのファシストたちが書き残したものをいま読んでみると、じっさいかれらがいかに藝術家であつ

たか、汎美主義の熱烈な信者であったか、あらためて愕然とするほかはないのである。ヒトラーは「世紀の祭典」、オリンピックを組織したし、ムソリーニはみづからの帝都、新しいローマを建設した。そればかりではない。むしろかれらの政治理念そのものが、徹頭徹尾、「広場」と「お祭」の思想につらぬかれてゐたといつてもよいのである。理性の領域と感情の領域がごたまぜにされて、現実の世界とフィクションの世界が一元化された。やがて日常の生活様式がすみずみまで「デザイン」されると、つひには戦争が、さうした思想のもつとも華麗な発露となった。戦争中、私は『空中戦の美学』といふ書物がだまじめで出版されたことを知つてゐるが、人間が悲惨の極限にあつたあの時代にこそ、まさに藝術は巨大な現実を覆ひつくし、現実そのものが藝術化されてゐた事実を忘れてはならないのである。

その事実を知つてか知らずか、現代の藝術は、ふたたび実生活との境界をとり払はうと試みてゐる。「お祭広場」の思想を象徴的なあらはれとして、およそふたつの方向から、現実と藝術が癒着をはじめてゐるのである。

第一は、デザインといふ現象のおびただしい氾濫にあらはれてゐる。もつとも実用的であるべき日常雑貨にいたるまで、今日では、周到きはまる色とかたちの配慮が加へられる。コマーション・メッセージが詩人のことばで粧はれ、美術家は建築と都市計画に羨望の眼をむける。生活せんたいがデザインされて、街頭も家庭のなかも、人間の生きる場所はことごとく「お祭広場」に変へられてゆく。さうしてそのことはあきらかに、現代のいはゆる「純粹藝術」が、それじたい、「お祭広場」のなかにみづからを解消しようとする傾向に呼応してゐるのである。

私は今日のデザインが生活の知慧として、それじたい発達してゆくことを非難してゐるのではない。一般に、現代の造形意志のはたらきが、作品の枠を破つて、無限定な現実の環境そのものにむかつてゐることに注目するのである。デザインこそ現代のほんとうの藝術だといふやうな思想が流行して、生活の知慧

にすぎないものが、藝術の原理にとってかはることを恐れるのである。昨今の美術展にはすでにその徴候があきらかなのであるが、それは藝術と現実のどちらにとっても危険なことではないのだらうか。

藝術はときに有毒な、個性と妄執の世界であり、現実はつねに衛生無害な、常識の世界でなければならぬ。作品といふまるとまりは、両者をそれぞれに純粹に保つために、欠くことのできない重要な境界線だったのである。作品の世界に踏みこむか踏みこまないかは、したがって、われわれ鑑賞者の完全な自由であった。作品の内側にのりこんでゆくといふことは、鑑賞者の積極的で、主体的な決意された行為でもあった。だが、もし藝術が生活の環境としてあたへられたなら、われわれはいったい、どこでさうした積極的な決意をすればよいのだらうか。じっさい今日もなほ藝術家の表現は、個性による征服と支配の欲望を失ってはゐない。さうした征服欲が作品の枠を破って、ひそかに現実のなかへ忍びこんで来るのを見てゐると、私はその連想に奇妙な恐怖を感じないわけにはゆかないのである。ある日、われわれは鑑賞の主体的な能力を失って、いつのまにか自分の精神さへも、だれかに「デザイン」されてゐるのを発見するのはないだらうか。

藝術の作品の枠を破るといふことは、しかし、第二の方向からも着々と進められてゐる。日常生活の断片が、逆に作品の内部へ圧倒的な勢ひで流れこんだのである。よく知られるポップ・アートや、具象音楽ばかりのことではない。ルポルタージュや自働記録の名のもとに、文学や映画のなかにも、きれぎれの現実が受動的なかたちで投げこまれてゐるのである。

藝術が現実をうちに含んで、もしそれで両者が豊かになるのなら、もちろん問題は無いといへるだらう。だがじっさいは、それは妙に中途半端な、藝術家の無責任な態度にむすびついてゐる。いつであつたか、千円札を実物通りに模造して、それを自分の展覧会の招待状として配布した美術家があつた。かれがほかならぬ千円札を写したといふことは、なにもその色とかたちが純粹に美しかったからではないだらう。そ



れが現実の日本の通貨であり、それを模造することが現実の犯罪になるがゆゑに、いはばそのスキヤンダリズムがかれを惹きつけたのにちがひない。だとすればかれは当然、現実の裁判と判決をうけいれて、現実の懲役をみづからの「藝術行為」としてひきうけるべきではなかったのだらうか。身を挺して数年を獄中にすごせば、それこそほんとうの「ハブニング」になったのだが、気の弱い青年はそれを逃れようとしたのである。多くの批評家が法廷の弁護に立ったが、私にはそれが、現実と藝術の両方にたいする侮辱であるやうに思はれてならない。青年は現実の力をかりて、自分の作品に価値をあたへ、しかも藝術の名のもとに、現実の制裁をまぬかれようとしたからである。

このエピソードは、しかし今日の藝術状況をみごとに象徴してゐるのではないだらうか。藝術が藝術であることに自信を失ひ、その自覚にすっかりあせりながら、しかも藝術であることをどうしてもなげうつことができないのが現代なのである。

かつて久しく、藝術は現実を描きとるものと考へられてゐた。あるばあひは象徴的に、あるばあひは写實的に、とにかく藝術は現実の外に立って、にもかかはらずそれを写しとるものと信じられた。二十世紀にいたって、その信仰が崩れさつたとき、じつは現代藝術のあらゆる昏迷がおし寄せて来たやうに思はれる。現代の現実はいひしれぬ焦燥感のしびよるだらう。その焦燥感がやがて自暴自棄の頂点に達したを業とする人間にはいひしれぬ焦燥感がしのびよるだらう。その焦燥感がやがて自暴自棄の頂点に達した瞬間に、藝術を現実に癒着させるなだれのやうな現象が起つたのではないだらうか。——現実を写しとる力がもはやないとするならば、藝術は今日、現実の外に独立するどのやうな資格があるといふのか——。

さう考へてみると、現代藝術のさまざま新しい外観は、あんがい古めかしい、現実依存の精神をそのままひきついでゐるともいへるのである。われわれはここに、ひとつの素朴な疑問を提出してゐることが出来る。——いったい藝術は昔から、現実を描くといふことをただひとつの資格として、やうやく現実の